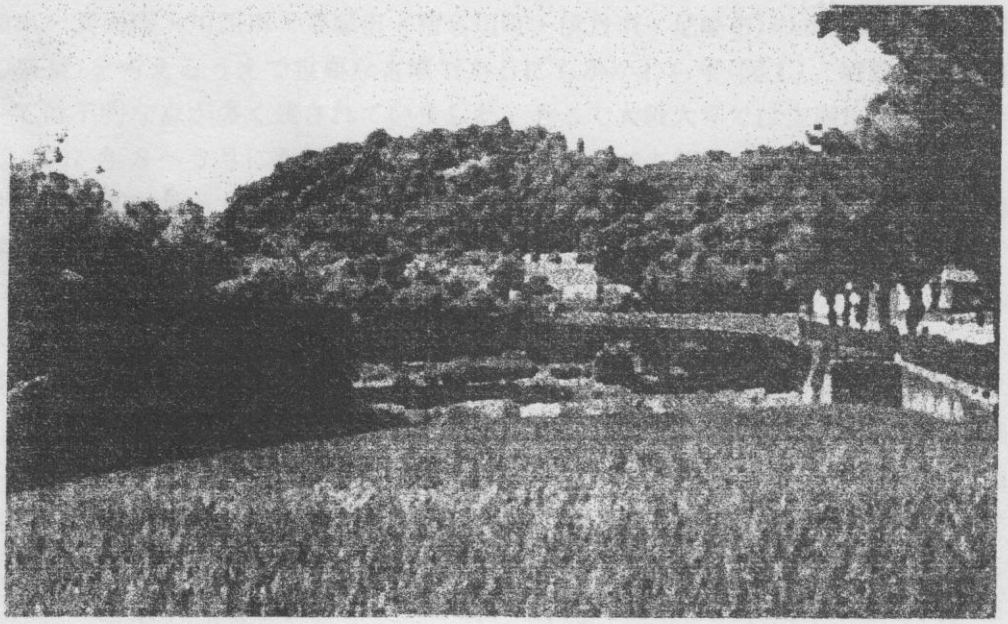
2009年9月19日(土)

2009年度長尾山古墳発掘調査現地説明会資料

宝塚市教育委員会・大阪大学考古学研究室



1　調査の概要

現地住所：兵庫県宝塚市山手台東１丁目４－４２４(図１・２)
(阪急宝塚線山本駅北西徒歩１０分)

調査主体：宝塚市教育委員会・大阪大学考古学研究室

調査方法：墳丘および墳頂部の平面発掘調査(図３、５ヶ所、合計６３㎡)

調査期間：2009年8月31日～9月26日(予定)

2　主な調査の成果

①後円部墳頂において棺を設置するための**長辺８m以上・短辺約５m**の掘り込みと木棺を反映した可能性のある**長さ3.3 m、幅0.6 m**の落ち込み部分を検出しました。

②後円部墳頂の落ち込み埋土から土師器片約 50 点検出。これらが検出されたことにより、墳頂部で丸底の壺などを用いた葬送儀礼を行っていたことが判明しました。古墳時代前期(3世紀後半から4世紀)の大型前方後円墳が集中する奈良県東南部(桜井市・天理市)の古墳(たとえば天理市黒塚古墳：前方後円墳／約 130 m)からは墳頂部から複数の土師器が出土しています。兵庫県下でも、これまで神戸市灘区西求女塚古墳(前方後方墳／ 98 m)、神戸市西区白水瓢塚古墳(前方後円墳／ 56 m)、たつの市吉島古墳(前方後円墳／ 30 m)において墳頂部から土師器片がみつかっていますが、猪名川流域では長尾山古墳の例が初例となります。

③前方部東側において**長さ 4.1 m**にわたり２段目葺石を検出。前方部の形が明らかになりました。

3　調査に至る経過

長尾山古墳は 1969 ～ 1970 年に宝塚市教育委員会・夙川学院短期大学日本歴史研究会がおこなった測量調査により、長さ 36 mの前方後方墳であると推定されました。ただし、その後は発掘調査が実施されることはなく、猪名川流域(兵庫県南東部～大阪府北西部：豊中市・池田市・箕面市・川西市・宝塚市・猪名川町・伊丹市・尼崎市)の首長系譜(各地域ごとの首長の盛衰)を考えるうえで重要な古墳であるにもかかわらず(図１)、墳丘形態や築造時期については不明な点が多く残されていました。そこで大阪大学では宝塚市教育委員会の協力を得て 2007 年８～９月にかけて、長尾山古墳の測量およびトレンチ調査を行いました。続いて昨年度(2008 年８月～９月)は、宝塚市教育委員会と大阪大学考古学研究室の両者が共同で調査主体となり発掘調査を実施しました。

その結果、長尾山古墳は墳長 39 mの前方後円墳であり、出土埴輪からみて、これまで考えられてきた４世紀末～５世紀初頭(古墳時代前期末～中期初頭)のものではなく、４世紀初頭(古墳時代前期前半)にさかのぼる猪名川流域では最古の古墳であることが明らかになりました。また、墳丘西側では葺石基底石と埴輪列を良い状態で検出し、墳丘西側の詳細な形が判明しました。ただし、**①後円部の段築成の構造**、**②前方部の開き具合**、などが課題として残りました。また、**③後円部墳頂における埋葬施設の残存状況**についても不明でした。

そこで、本年度は墳丘については残りが良いと推定される墳丘東側の後円部斜面に１ヶ所(2009 後円部１トレンチ)、前方部に３ヶ所の合計４ヶ所に調査区を設けました。また、埋葬施設の残存状況を把握するために墳頂部には 6.8 m× 7.8 mの調査区を設けました。

(寺前直人)

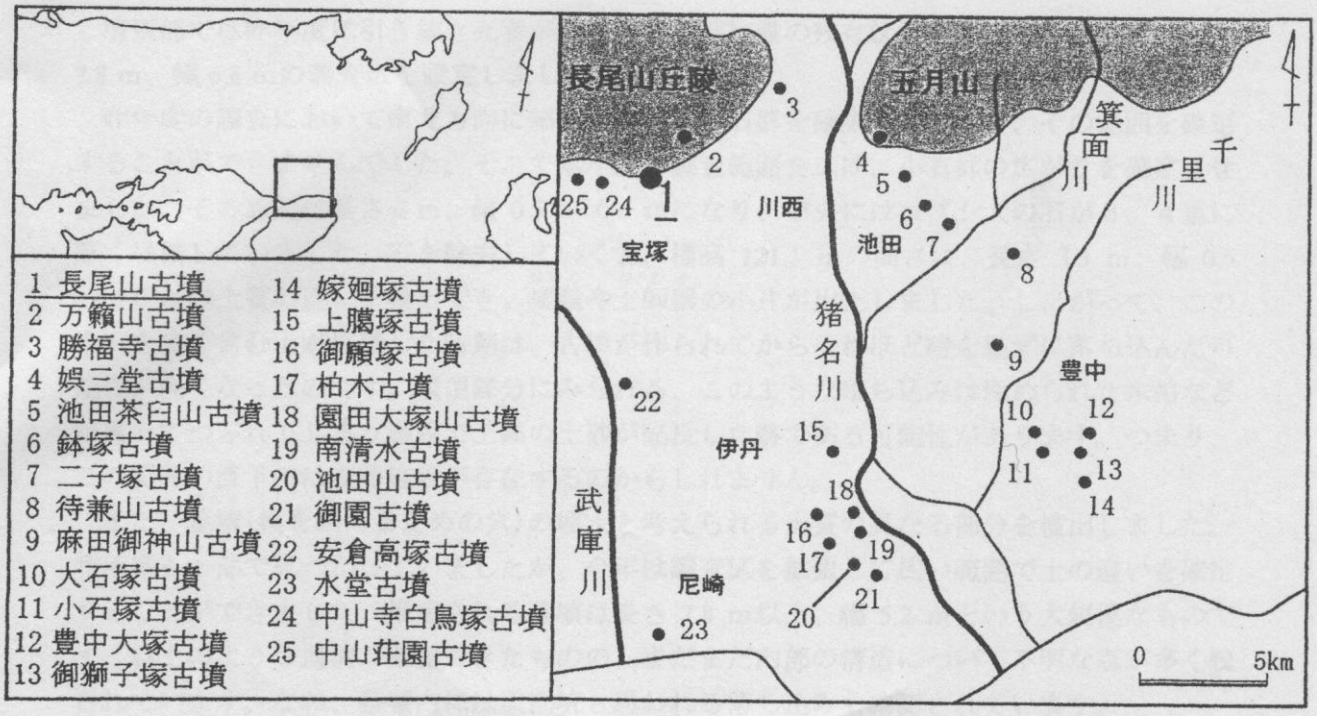


図１　長尾山古墳と周辺の古墳

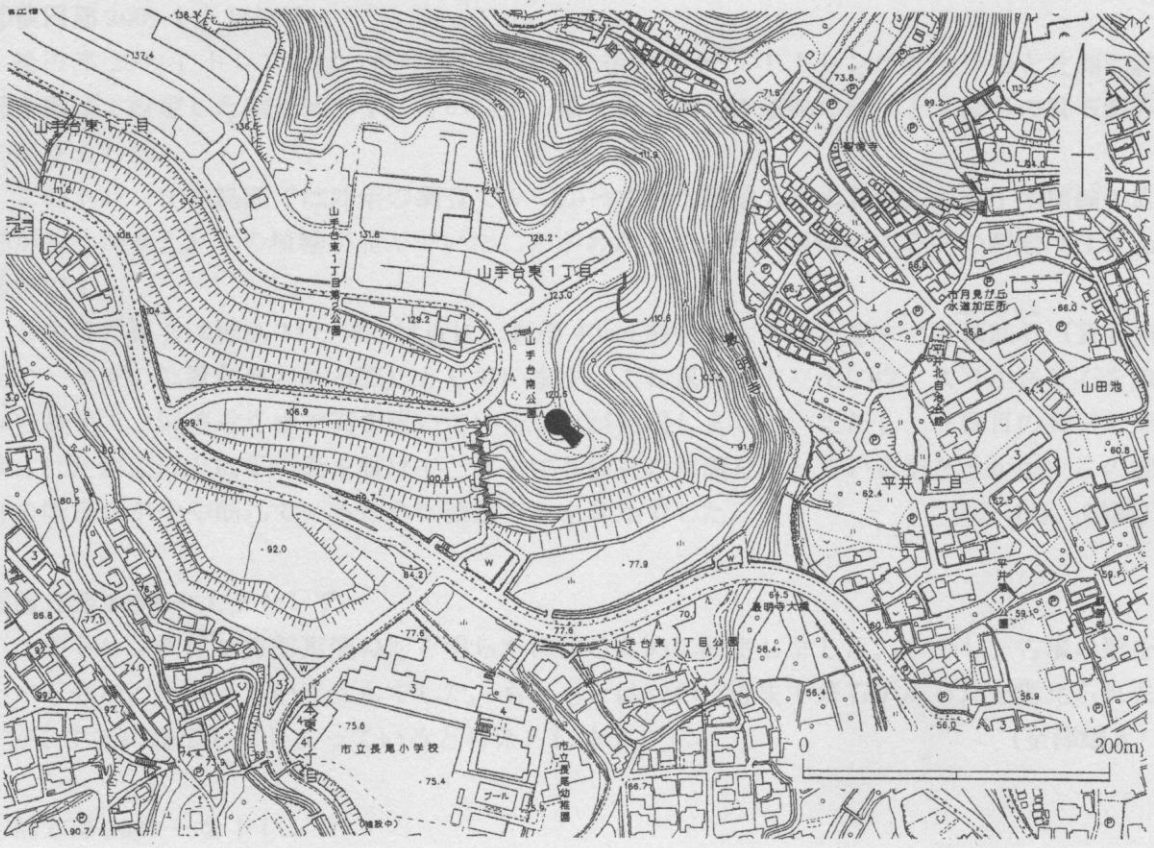


図２　長尾山古墳の所在地

４　調査成果

(１)各地点の成果

①墳頂(ふんちょう)部調査区

墳頂部では昨年度に引き続き死者が葬られた埋葬施設の残存状況の確認を目指して、長さ7.8 m、幅 6.8 mの調査区を設定しました。

昨年度の調査において南北方向に細長く広がる小石群を確認しましたが、その範囲を確定することができませんでした。そこで本年度は調査範囲を広げ、小石群の広がりを確定させました。その範囲は長さ４m、幅 0.5 ～ 0.6 mになり、中央にはコブシ大の石が３、４重に厚く堆積していました。石を除去していくと、標高 121.1 mの高さに、長さ 3.3 m、幅 0.5 ～ 0.6 mの土質の違いを検出でき、埴輪(はにわ)や土師器(はじき)の小片が出土しました。したがって、この小石を多く含む土が堆積した時期は、古墳が作られてからそれほど時を経ずに落ち込んだ可能性が高くなったのです。墳頂部分にみられる、このような落ち込みは埋められた木棺などが腐ってつぶれてしまう過程で上部の土砂が陥没した跡である可能性があります。つまり、この範囲の直下には埋葬施設が存在するのかもしれません。

また、墓壙(ぼこう)(棺を納めるための穴)の埋土と考えられる土質の異なる部分を検出しました。昨年度も一部で見つかっていましたが、今年は調査区を拡張して広い範囲で土の違いを確定することができました。推定される墓壙は長さ 7.8 m以上、幅 5.2 mという大規模なものです。以上のような遺構(いこう)が確認できたものの、まだまだ内部の構造について不明な点が多く残されています。なお、墓壙内には盗掘坑と思われる落ち込みも確認されています。

(中久保辰夫)

②後円部 2009-1 トレンチ

後円部 2009-1 トレンチは、昨年度に調査した後円部 2008-1 トレンチを墳頂側と北側に範囲を広げて設定した調査区です。その結果、新たに１本分の埴輪の底部と２段目の葺石がみつかりました。

このトレンチの範囲では昨年の調査でみつかっていた埴輪２本の北側にもう１本埴輪の底部がみつかり、3 本の埴輪が並んでいたことがわかりました。埴輪の中心間の距離は 1.0 m 前後です。

２段目の葺石は標高 117. 8m 付近に、長径 40cm 前後の大きな石をすえて基底石（葺石斜面の一番下の位置に使われる石）としています。この基底石より上には、より小さな石を組み合わせて、墳頂近くまで石を置いていることが判明しました。ただし、２段目の葺石で形成された斜面の上に平坦面を設けて、さらに３段目の斜面を造っているかどうかは、この部分の墳丘面がやや崩れているために確定できませんでした。（森　暢朗）

③前方部 2009 －１トレンチ

このトレンチは前方部東側の形を明らかにするために設定しました。しかし、古墳の形を示す石列などは残っていませんでした。もともとはこの付近まで葺石があったと考えられますが、すでに流出してしまっていると考えられます。（金澤雄太）

④前方部 2009 －２トレンチ

このトレンチは前方部西側の形を明らかにするために設定しました。その結果、昨年度の調査でわかった２段目の葺石に続くと考えられる石列を確認することができました。確認できた石列は長さ 2.4 m、高さ 45 ｃｍで、35 ～ 45cm 程度の石が基底石として置かれ、その上に 10 ～ 30cm 程度の石を積み上げています。基底石は前方部前端方向に向けてゆるやかに標高が低くなっており、尾根の傾斜にあわせて前方部が造られていることがわかりました。ただし、１段目の葺石は残っておらず、１段目平坦面(テラス)に樹立されていた埴輪も確認できませんでした。この箇所ではすでに盛土とともに流出してしまったとみられます。

（金澤）

⑤前方部 2009 －３トレンチ

このトレンチは、前方部東側の形を明らかにするために、昨年度の前方部 2008-2 トレンチを南に延長する形で設定しました。その結果、このトレンチでも２段目の葺石列を確認することができ、石列は長さ 4.1 m、最も残りのよいところ平坦面（テラス）から 45cm の高さまで残っていました。基底石には大きいものでは 50cm の大きな石が置かれ、その上には 10 ～ 30cm 前後の石がかなり急な角度で積まれていました。２トレンチ同様、前方部前端方向へ行くにしたがって、ゆるやかに基底石の高さが下がるという特徴がみられます。

前方部２トレンチと同じく、１段目の葺石やテラス面上に樹立されていた埴輪はみつかりませんでしたが、前方部の形をほぼ確定することができたことは今年の大きな成果の１つです。（金澤）

（2）遺物（図４・５）

長尾山古墳からは、2007 年度、2008 年度の調査で約 8000 点の埴輪片が出土しています。2009 年度の調査でも 500 点ほどの埴輪片、50 数点の土師器片を得ることができました。

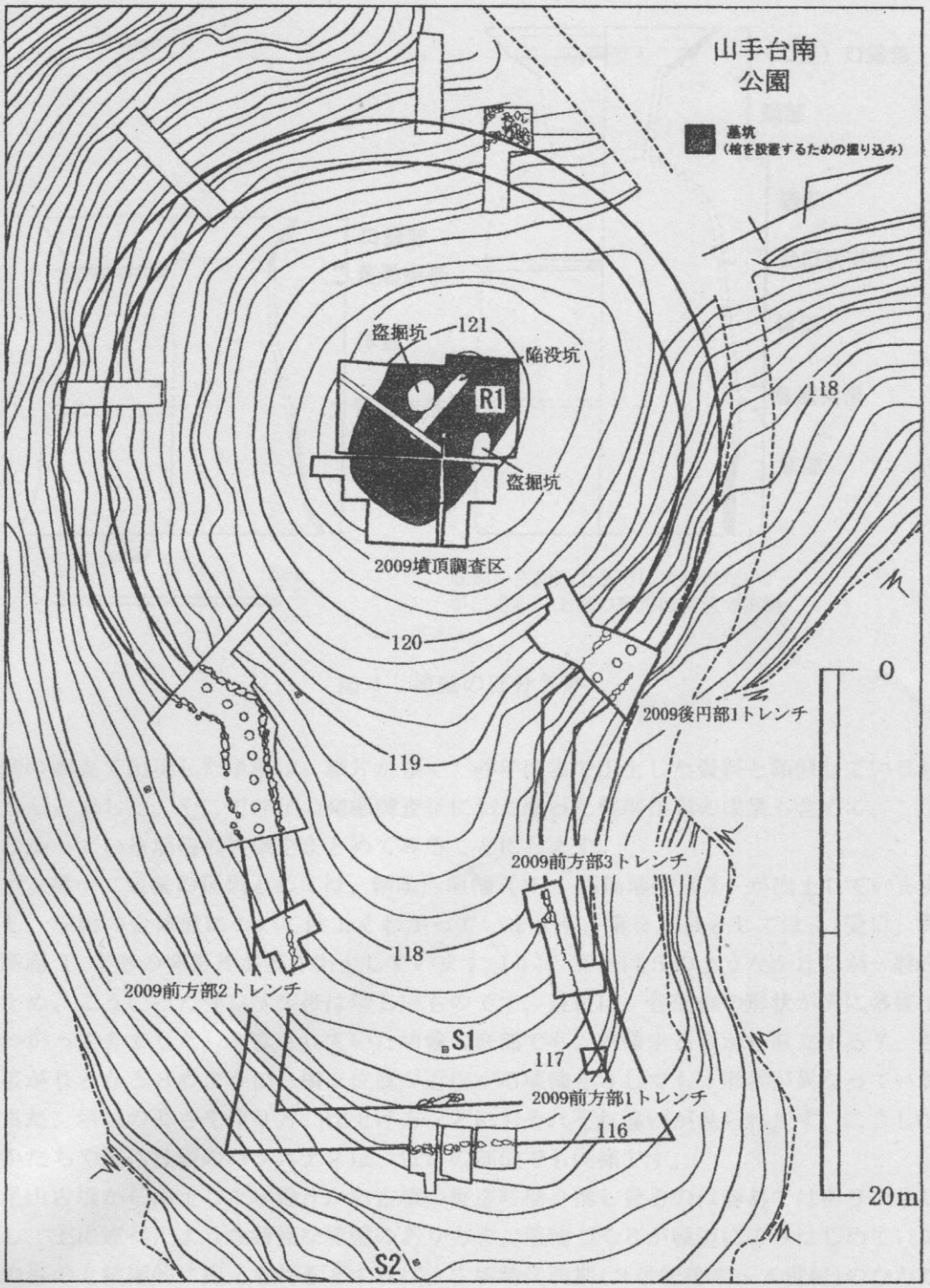


図３　今年度の調査区と墳丘の復元案

特筆すべきものとして、2009 墳頂調査区から出土した土師器片が挙げられます。土師器片は木棺などが落ち込んだと考えられる陥没坑（かんぼつ）の範囲から検出されました。小片が多いために、もともとのかたちを想定することは難しい状況ですが、小型の丸底土器（まるぞこどき）（図５-１）や器台に復元できそうです。墳頂部から葬送儀礼にともなう土師器が確実に出土した事例は、実はあまり多くありません。近隣では、神戸市西求女塚（にしもとめづか）古墳などが類例として挙げられますが、猪名川流域では初例となります。

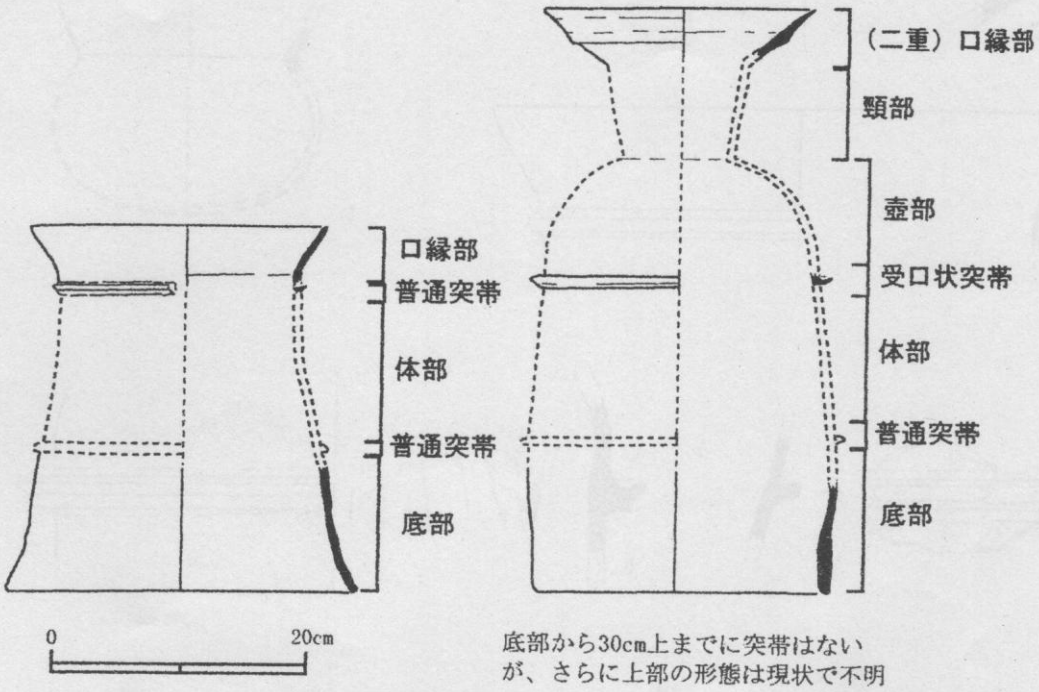


図４　埴輪の部分名称

今回の調査で出土した埴輪は、細片が多く、昨年度まで出土した資料と類似しているものがほとんどでした。そこで昨年の発掘調査後におこなった整理作業の成果も含めて、これまででわかっている埴輪の特徴をまとめてみることにします。

まず、第一に埴輪の種類としては、朝顔形埴輪（２）、円筒埴輪（３）が出土しています。ただし、埴輪の全体像についてはよくわかっていません。第２点目としては、「受口」状を示す断面 L 字形の突帯片が多く出土しています（４）。突帯は５のようなかたちが一般的であるため、こういった受口状突帯は珍しいものです。最後に、各部位の形状が実に多様なことがわかってきました。樹立されていた埴輪の底部でも、内傾する６から直立する７、さらに裾広がりとなる８のように、樹立位置が近接する埴輪どうしでも、形状が異なっていました。また、埴輪の薄さや作り方、仕上げ方などにもそれぞれ違いが見られます。こうした埴輪のかたちや製作技術のバラエティは、ほかの部位でも同様です。

長尾山古墳から出土した埴輪片から古墳の築造時期を推し量るのは容易ではありません。しかし、上に述べたような特異な埴輪のあり方を、埴輪づくりが軌道にのりはじめていない段階のものと積極的に捉えられるとすれば、古墳時代前期（３世紀後半～４世紀）のなかでもその前半期に位置づけられるといえます。　（中久保）

５　調査成果のまとめと意義

①古墳の葬送儀礼の痕跡を発見

後円部頂上で昨年見つかっていた礫群（小石群）が、古墳に伴うものであることが判明しました。礫群中からは丸底土器片や器台片など多数の土師器片がみつかり、埋葬終了後に飲食を含む儀礼を行ったことが判明しました。猪名川流域では最古となる古墳の葬送儀礼の様子を知るてがかりを得ることができました。丸底土器を使った葬送儀礼は、大和をはじめ各地

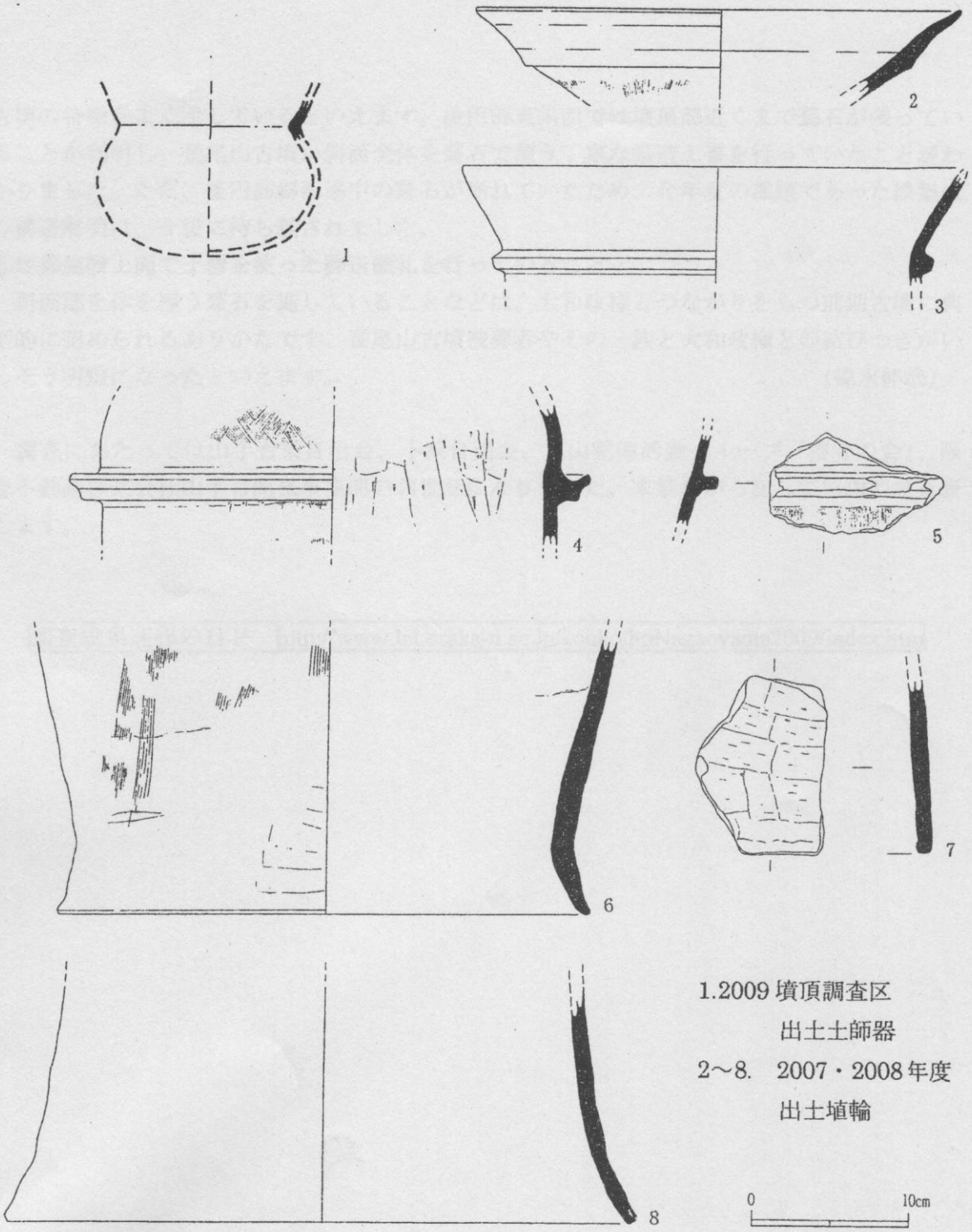


図５　今回の調査とこれまでの調査で出土した遺物

の初期の有力古墳で認められており、被葬者一族が大和政権の葬送儀礼のスタイルを猪名川流域でいち早く取り入れた勢力であったことがわかります。

②墳丘構造をより確実に把握

前方部東斜面の葺石基底石列を約 4.1 mにわたって検出したことにより、昨年度の西斜面の調査成果と合わせて前方部の形状がほぼ確定しました。前方部があまり開かない形で前期

古墳の特徴をよく示しているといえます。後円部東斜面では墳頂部近くまで葺石が残っていることが判明し、長尾山古墳が斜面全体を葺石で覆う丁寧な築造工事を行っていたことがわかりました。ただ、後円部斜面途中の葺石が崩れていたため、今年度の課題であった段築成の構造解明は、今後に持ち越されました。

③埋葬施設上面で土器を使った葬送儀礼を行っていること

斜面部全体を覆う葺石を施していることなどは、大和政権とつながりをもつ前期古墳に典型的に認められるありかたです。長尾山古墳被葬者やその一族と大和政権との結びつきがいっそう明瞭になったといえます。（福永伸哉）

調査にあたっては山手台東自治会、小浜自治会、里山整備活動グループ「櫻守の会」、阪急不動産株式会社山手台開発事業部のお世話になりました。末筆ながら記して感謝の意を表します。

調査成果速報のＨＰ	http://www.let.osaka-u.ac.jp/kouko/hpNagaoyama2009/index.htm